

がんの「痛み」をとる!

シリーズ 第15回

「緩和ケアは生活に彩りを与えてくれるためにある。決して「耐えるため」といった消極的な治療ではないのです。

がんの痛みは単に身体的なものに留まらず、心理的な要素からも感じられるものであり、その痛みは本人でなければわからぬものである。しかし、その痛みは表情や姿勢の変化などにも現れることがあり、本人の訴えと合わせて痛みを評価し、積極的に取り除いていく。痛みが緩和されることにより、生活を楽しむゆとりが生まれ、治療にも積極的になるといった変化が見られるようになる。

藤本 肇 医師

1993 防衛医科大学卒業
同年防衛医科大学第1外科入局
1995 香川労災病院外科通修医として研修
1997 防衛医科大学第1外科専門研修
2004 防衛医科大学医学研究科卒業
2005 ふじもと在宅緩和ケアクリニック開設



膀胱がんの痛みが和らぎ、 抗がん剤治療を継続

最初のケースは膀胱がんの女性。「初めて来院された時は、痛みのせいもあり抗がん剤治療をやめた」とまで言われていました。痛みの緩和のため、オキシコドン錠を最少の1日10mgから使い始め、これが功を奏して痛みはかなり軽快して表情も明るくなりました。その結果、抗がん剤治療も並行して進めることが出来るようになりました。もともとスポーツを楽しまれる活発な方で、痛みが緩和されてからは、元気を取り戻してご主人と旅行に行かれたりしています。そうすると、また一段と表情がよくなり、除痛だけにとどまらず、相乗効果を得ているようです。」その後、痛みの変化に伴い、オキシコドン錠の量は20mgまで増えたが、平行して行われている抗がん剤治療の効果と相まって、高いQOLを維持しているという。緩和ケア診療に携わる医師を中心に、麻薬系鎮痛薬（以下オピオイド）の使用方法は進歩しつつあり、従来誤解されてきたような幻覚などの副作用は見られず、一般に見られる便秘などの副作用もあらかじめ予防する薬を併用する

ことにより良好にコントロールできる方法が確立されつつある。これまで、オピオイドは痛みがかなり強い時のみ使われる薬とのイメージが強かったが、中等度の痛みから積極的に使用されるようになってきている。「痛み止めを早くから使うと、やがて効かなくなるのではないかと不安を持つ患者さんも多い。オピオイドは、「効く、効かない」では無く、「痛みに見合った量を適切に使用しているか」が効果に反映される薬であり、処方する医師と、使用する患者さんがそのことをしっかりと理解して、信頼関係の上に調節していくことが重要です。決まった時間に使用する痛み止めに加え、痛い時に追加して使う頓服薬をうまく組み合わせ、痛みの程度に応じて定時の薬を少しずつ増やす方法が一般的です。」と藤本医師は言う。

症状の緩和により、再び 趣味の集まりへ

80歳代の男性で、やはり膀胱がんで苦しんでおられた。浸潤性の膀胱がんで、病気を指摘された精神的苦痛と、腹部の痛みに苦しみ、外出することは叶わない状態だったという。「この方も、最初はオキ